國學院大學学術情報リポジトリ

The style of thinking and expression among university students by analysis of essay

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 猿田, 祐嗣, 草場, 稚菜
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001346

〔報告〕

作文課題からみた大学生の思考表現スタイル

猿　田　祐　嗣　　草　場　稚　菜

【要旨】

大学生の思考表現スタイルを四コマ漫画の作文課題で調査したところ、小学生の調査結果と同様、自由作文課題においては時系列で出来事を説明するスタイルがほぼ9割を占めることが分かった。出来事が出現する順に記述するスタイルは、分析対象となった本学の学生でも確かめられた。また、小学校教員を目指す割合が多い初等教育学科の学生においても、傾向は同じであることも判明した。しかしながら、条件作文課題においては因果律で説明する割合が全体で約2割に増え、特に初等教育学科の学生の約3割を占めた。書き出しの文が与えられたところから始まる課題においては、理由の説明として出来事を時系列で述べるとともに、結論に至るために最も重要な根拠をあわせて示す学生が半数を超えた。自由作文と条件作文に対する対応の仕方が異なることは注目に値し、学生は課題に応じて使い分けている可能性が示唆された。

【キーワード】

作文課題　大学生　思考表現スタイル　時系列　因果律

１．はじめに

OECDの「生徒の学習到達度調査：PISA」においては、21世紀の社会を生きる一般市民が身に付けるべきキー・コンピテンシーとして、「与えられた課題において重要な情報を取り出し、その他の情報やデータとの関連性を吟味・考察し、結論を導き出すために推論する能力」が求められている[1)]。周知のようにPISAにおいては、国際標準の学力を設定し、各国の子どもたちの到達度を測定しようとしている。21世紀に入ってからPISAを代表とする国際比較調査で設定されている学力は、端的に言うならば「子どもたちが学習を通して身に付けた自らのものの見方や考え方の良さを、記述したり発表したり説明したりして表現する能力」として差し支えないと考えられる。このような能力を身に付けるためには、課題文を注意深く読み、何が問われているかを把握し、その問いに答えるために必要な情報は何であるかを同定できるように、学校では国語科を中心とした授業における指導が重要となってくる。すなわち、与えられた情報を分析・吟味した上で、課題に対する解答を他人が読んで理解できるよう的確に表現できる能力を育成することが求められていると言えよう。

人間開発学部において掲げるコア・コンピテンシーである「論理的・科学的思考能力」を、筆者である猿田は「自然だけでなく我々を取り巻く環境や社会で生起する様々な諸問題を解決する

過程で、客観的・実証的な情報やデータといった証拠を用いて論理的に結論を導き出せる能力」として捉えてきた[2)]。しかしながら、我々の身の回りで生ずる諸問題は、必ずしも自然科学における実験に代表されるような実証的な方法を用いて得られる情報やデータに基づいて解決できるとは限らない。かえって、世の中の多くの事柄は、各人が持っている知識・技能によって解決方法を考え、過去の経験や体験をもとに判断や推論を行い、解決を試みられる。よりよい解決に向かうためには、できるだけ曖昧な情報や間違ったデータは排除し、適切な方法や得られた結論の説明の仕方の客観性や妥当性が多くの人々の納得を得られるようにすることが求められる。

人々の納得を得るために必要となる客観性や妥当性は、日常のコミュニケーションにおいて、常識とされる知識の使用や説明の仕方に現れ、客観的で妥当な情報やデータに基づいた条件から帰結される結論が適切な対応関係にあれば論理的な推論とみなされる、と考えられる。そこで、日常のコミュニケーションにおいて、上述の客観性・妥当性を帯びた論理的な推論はどのように行われているか、大学生に対する作文課題によって明らかにしようとした。

２．方法

平成25年度から猿田が担当する「科学的とは何か」と題する教養総合科目のテーマ別講義科目の受講生に対して、渡辺雅子氏の四コマ漫画の作文課題[3)]を用いて調査を実施した。渡辺は図1の作文課題を用い、他人とのコミュニケーションにおいて取り込んだ情報をいかに編集して納得しやすい形にするか、その枠組となる「思考表現スタイル」について日米仏の子どもたちの間で国際比較を行った。その結果、四コマ漫画から受け取った情報をいかに編集して表現するかという「思考表現スタイル」に、日米仏の３か国で大きな違いがあることを明らかにした。

絵を見て書く作文

けんた君は小学生です。テレビゲームと野球をするのが大好きです。けんた君は野球チームのエースピッチャーで、毎週土よう日の朝早く野球のしあいをします。下の絵はけんた君の一日のでき事をえがいています。けんた君にとってその日がどんな日だったか、書いて下さい。（書く前にまず四つの絵をすべて見てから書き始めて下さい。）

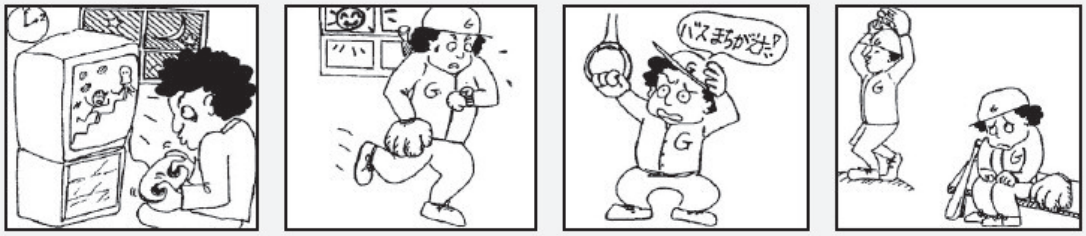

図1　四コマ漫画の作文実験課題　（渡辺 2004，p.19、転載許諾済）

課題は二つからなり、まず第1の課題として「少年にとってどのような一日であったか」と問い、自由に書かせる。次に、同じ四コマ漫画を使った条件作文課題として、「少年はしょんぼり

しています」という文から始め、この少年にとってどのような１日だったかを書かせるものであった。この自由作文課題では、日本やフランスの小学生の大部分が四コマ漫画をみて、起こった出来事を順番に述べる「時系列型」の思考表現スタイルを示したのに対して、アメリカでは「時系列型」に加え、まず初めに総括や評価となる結論を述べた後に、その原因や理由を述べる小学生が3割強みられることから、出来事を原因・結果で捉える「因果律型」の説明を行うという特徴が明らかとなった。第2の条件作文課題では、日本の小学生のほとんどは「なぜなら……」と始めて、第1の自由作文課題と同じように、出来事が起こった順番にすべてを述べた。一方、アメリカの小学生は「時系列型」の説明とともに、結果に直接結びつく原因のみを述べ、他の情報をすべて省略するタイプが大勢を占めた。つまり、「少年はしょんぼりしています。なぜなら野球の試合で投げられなかったから」という記述パターンである。このことから、日本の小学生は「時系列型」の説明スタイルを基本にしているのに対し、アメリカの小学生は「時系列型」と「因果律型」を課題によって使い分けていることが分かった。ところが、フランスの小学生は日本やアメリカと顕著な違いを示した。「時系列型」と「因果律型」に加え、その二つを統合する「俯瞰型」のスタイルが最も多かったのである。つまり、「少年はしょんぼりしています。なぜなら野球の試合で投げられなかったから」とアメリカの小学生のように始めて、その後3→2→1とコマを逆にたどって試合後の出来事を創作する。例えば、「野球の試合が終わり、がっかりしていてバスを間違えた。慌てて帰ったが夕食の時間に遅れてしまい、落ち込んだ気持ちを解消するためにテレビゲームをするでしょう。」といった具合に物語の流れを新たに再構成し直して、少年の１日全体を俯瞰して描いたのである。

上述のように、条件作文課題に対しても日本の小学生はあくまで「時系列型」の説明スタイルを一貫して示している。このような説明スタイルに対して、アメリカやフランスは異なる説明の仕方、すなわち思考表現スタイルをとっている。渡辺は、作文実験に参加した日米仏における小学校の国語教育、特に作文指導に違いがあることを明らかにし、それが思考表現スタイルに大きな影響を与えていると指摘している[4)]。日本の作文指導では、仲間と一緒に体験した出来事を時系列に沿って述べ、子どもたちの心の成長の軌跡を素直に表現することを期待する。このことは教育目的として大変重要なことである一方で、PISA型学力に位置づけられる読解力が振るわない原因の一つとなっていないだろうか。とりわけ、作文指導を行う小学校教師の多くが普段から、日本が従来重視してきた「時系列型」の思考表現スタイルをとる傾向にあるのではないだろうか。これが、本研究の出発点である。

具体的な方法としては、大多数が小学校教師を目指す初等教育学科在籍の学生が数多く受講する「科学的とは何か」と題する教養総合科目のテーマ別講義科目において、上述の四コマ漫画の作文課題を実施した。受講生の記述内容については、次のように分類することにした[5)]。

① 時系列型：時系列に沿って、作文調に書くスタイル

〔自由作文課題の記述例〕昨夜、遅くまでテレビゲームをしていました。寝坊をしてしまい、急いで試合に向かいました。バスをまちがえてしまいました。先発ピッチャーになれません

でした。

② 時系列＋結論型：時系列型であるが、最後に結論を書くスタイル

〔自由作文課題の記述例〕ゲームをして時間に追われ、あせっていてバスを間違え、それにより野球の試合に遅れ、試合に出られなかったから、もっと時間を気にして生活すべきだと思います。

③ 因果律型：結論から入り、その理由や根拠を説明するスタイル

〔条件作文課題の記述例〕なぜなら、ゲームをしたことによって試合までの行動に影響が出て、結果的に試合に遅れ、出られなかったからです。

④ 結論型：結論のみ

〔自由作文課題の記述例〕大好きなゲームをちょうどよいところでやめていれば、もう一つ大好きな野球に遅刻することなく行えたという後悔をした日

⑤ 俯瞰型：四コマ漫画に続くストーリーを創作

〔条件作文課題の記述例〕だから、試合が終わったその日の夜もやけになってテレビゲームをして夜更かしした。

３．結果

テーマ別講義科目「科学的とは何か」は平成25年度から開講し、４年間で約200名が受講している。上述の作文課題に回答し分析対象となったのは166名であり、内訳を表１に示した。

表１　分析対象者の人数と在籍学部・学科、性別、入学年度の内訳　（数値の単位：人）

内訳＼学部		人間開発学部			文学部	経済学部	神道文化学部	計
		初等教育学科	健康体育学科	子ども支援学科				
性別	男子	49	39	−	5	5	1	98
	女子	31	22	7	6	1	−	68
入学年度	2016	−	−	−	3	−	−	3
	2015	11	−	2	3	1	−	17
	2014	30	18	−	3	1	−	52
	2013	23	23	5	−	2	1	54
	2012	8	11		1	−	−	20
	2011	6	9		−	1	−	16
	2010	2	−		1	1	−	4
計		80	61	7	11	6	1	166

分析対象者のうち、約半数の80名が初等教育学科に所属し、人間開発学部に所属する学生がほぼ９割を占める。次から、分析した記述内容を分析対象者全員と初等教育学科所属学生に分けて示す。

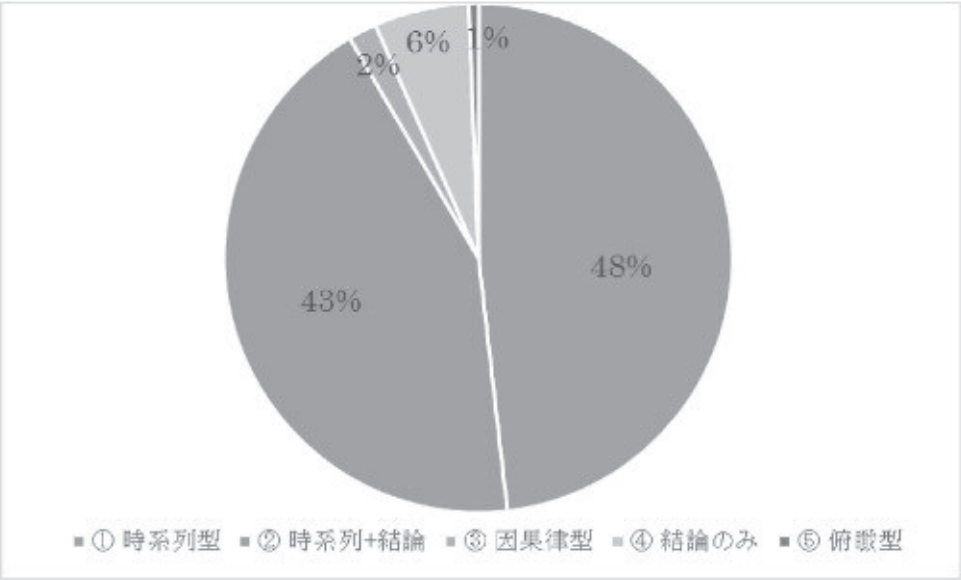

図2-1　自由作文課題の記述内容の分類結果（全員 N=166）

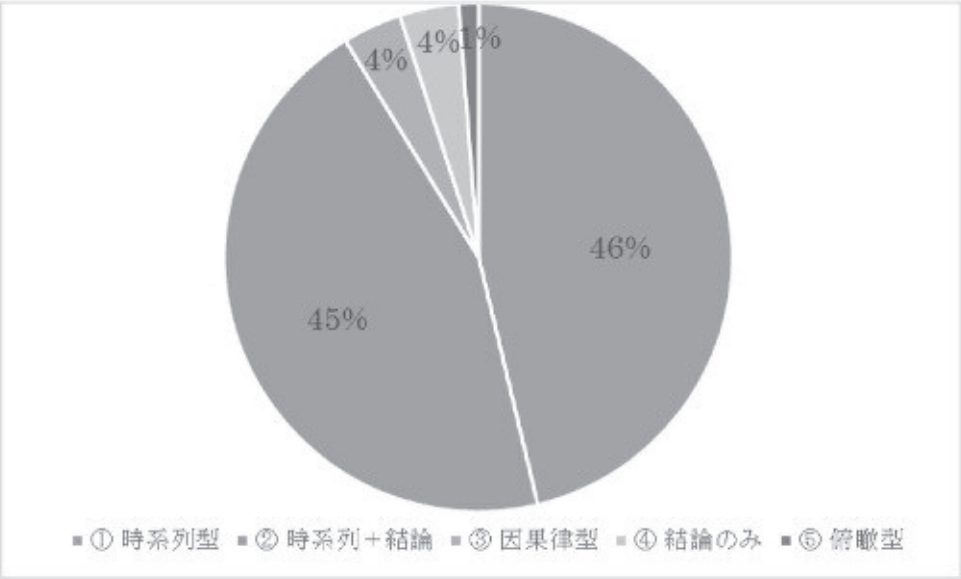

図2-2　自由作文課題の記述内容の分類結果（初等教育学科 N=80）

図2-1と図2-2は、自由作文課題について分析対象者全員と初等教育学科（以降、初等と略）の記述内容を分類し、人数をパーセンテージで示したものである。自由作文課題については、①時系列型が最も多く、ほぼ半数の48％（全員）、46％（初等）を占め、②時系列＋結論の43％（全員）、45％（初等）が続く。自由に書かせる作文の場合、時系列を基本とした記述が約9割に達し、渡辺の小学生対象の調査結果と変わらない。それに対して、③因果律型は2％（全員）と4％（初

等）のみにとどまっている。

図3-1と**図3-2**は、条件作文課題について分析対象者全員と初等教育学科の記述内容を分類し、人数をパーセンテージで示したものである。条件作文課題については自由作文課題と異なり、②時系列＋結論が半数を超える57％（全員）と52％（初等）を占め、次に多いのが③因果律型で19％（全員）と27％（初等）である。条件作文課題の場合、時系列を基本とした記述が約7割に減り、結論のない①時系列型のみは渡辺の小学生対象の調査結果と異なり、２割に満たなくなる。

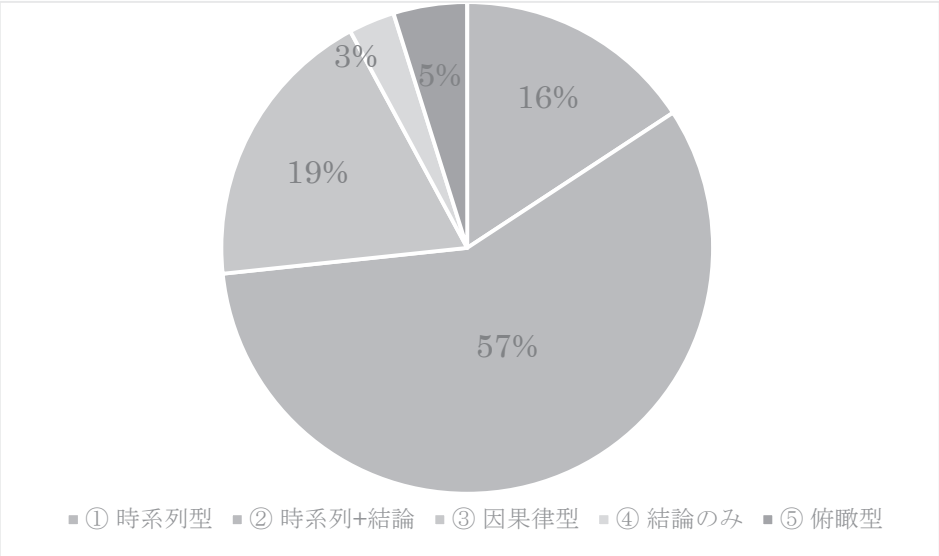

図3-1　条件作文課題の記述内容の分類結果（全員 N=166）

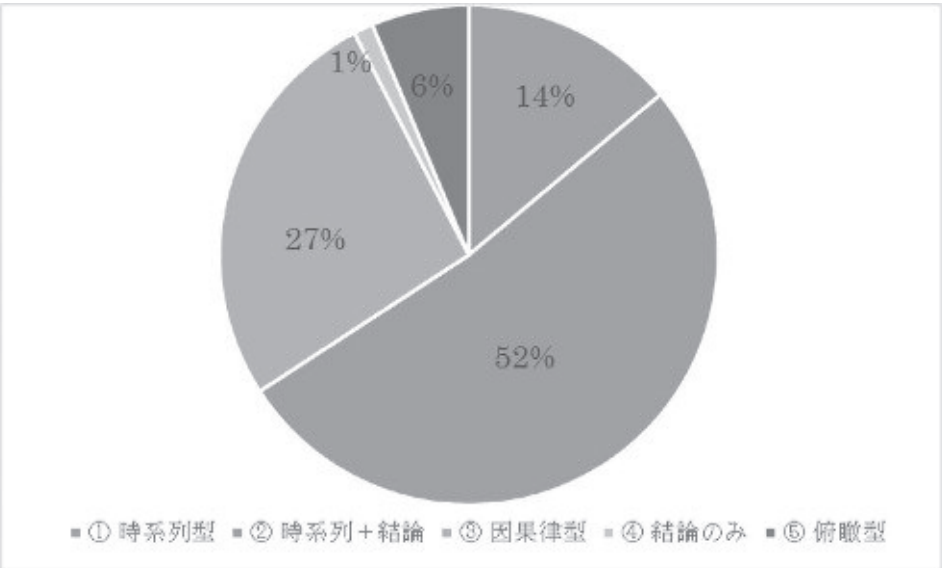

図3-2　条件作文課題の記述内容の分類結果（初等教育学科 N=80）

４．考察とまとめ

大学生の思考表現スタイルを渡辺の四コマ漫画の作文課題で明らかにしようとしたところ、日本の小学生と同様、自由作文課題においては時系列で出来事を説明するスタイルがほぼ9割を占めることが分かった。出来事が出現する順に記述するスタイルは、分析対象となった本学の学生でも確かめられた。また、小学校教員を目指す割合が多い初等教育学科の学生においても、傾向は同じであることも判明した。

しかしながら、条件作文課題においては因果律で説明する割合が全体で約2割に増え、特に初等教育学科の学生の約3割を占めている。状況説明が与えられたところから始まる課題においては理由や根拠を示すことが必要であると考えるためであろうか、時系列で説明する場合においても、理由の説明として出来事を時系列で述べるとともに、結論に至るために最も重要な根拠をあわせて示す学生が半数を超えている。自由作文と条件作文に対する対応の仕方が異なることは注目に値し、学生は課題に応じて使い分けている可能性が示唆された。

分析対象者数が少ないため、受講生の入学年度による学習指導要領の影響を調べることはできなかった。また、条件作文課題においては俯瞰型の説明スタイルをとる学生も若干みられることが分かったが、これらについては今後の課題として、研究を続けていきたい。

【付記】

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費助成金（課題番号24300271）の助成を受けて行われたものである。

【引用文献】

１）国立教育政策研究所編（2016)『生きるための知識と技能 6　OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2015年調査国際結果報告書』明石書店

２）猿田祐嗣（2015）コア・コンピテンシーとしての「論理的科学的思考能力」及び「自己表現力」に関する一考察、『國學院大學人間開発学研究』、第6号、pp.1-10

３）渡辺雅子（2004)『納得の構造－日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社.

４）渡辺雅子（2006)「日米仏の思考表現スタイルを比較する－３か国の言語教育を読み解く」『BERD』Vol.6, pp.21-26.

５）草場稚菜（2016）日本の特性を生かした教育の在り方、平成28年度卒業論文

（さるたゆうじ　國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）

（くさばわかな　國學院大學人間開発学部初等教育学科４年）